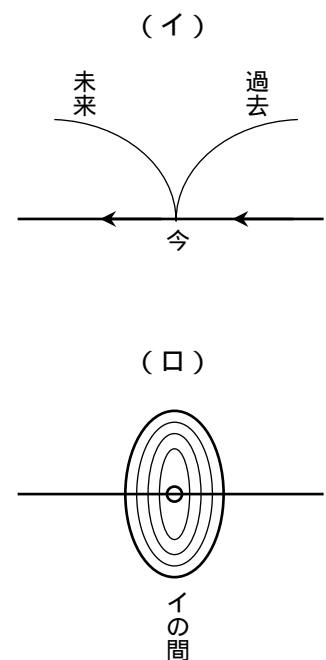


前号にて大祓祝詞が予言・宣布して来た人類の罪穢の大祓の精神的
内容について解説いたしました。その修祓とは、人々の犯す罪穢の一
つ一つを対象としてその内容を明らかにし、その上で宗教が従来行っ
て来たように「汝等悔い改めよ」と改心・懺悔させる事によって罪穢
を祓う事ではなく、世の中の人々の心の中に鬱積する種々のコンプレ
ックスを歴史創造の中に取り込み、これに心の光、即ち言霊の光の言
葉（^{ひば}霊葉）による新しい生命を与えて、罪穢を消滅させて行くことだ
とお話しました。謂わばその大祓の内容のキーワードは「創造の光」
でありました。御理解頂けたでありますでしょうか。

今号では、初めにその御理解を更に深めるため、大祓祝詞の大祓の
内容を言霊原理そのものの立場から、人類歴史創造の言霊の光の言葉
が何故人々の罪穢を消滅させる事が可能となるか、お話申上げてみた
いと思います。その「何故可能か」を最終的に御理解頂くために、言
霊の基礎原理・法則をいくつかの予備知識として取り上げることとい
たします。

第一に「時」とは何かという事です。現代人は過去・現在・未来と
時は流れて行くと思っています。これが常識でしょう。しかしその時
の中に生き、生活を営む人はただ時の中を流れて行くというだけでは
説明できないことがあります。人間は「今」に生きています。今以外
に生きてはいません。「若者は未来に羽ばたく」と言い、「老人は過去
に生きる」と言います。が、未来に羽ばたこうと希望を燃やすのは未
来に於いてではなく、今です。老人が過ぎし良き時代を回顧するのも
今なのです。人間の生命は今に生きています。人間の心の最奥の単位
である言霊は、イ次元の間にある「今」に存在します。これを「永遠
の今」と呼んでいます。ですから図を御覧下さい。時を現わす図は(イ)
となりますが、実際には(ロ)図なのです。煎じ詰めると、一切のも
のは「今」に備わっているという事が出来ます。この消息を禅は「一
念普く観ず無量劫、無量劫の事即ち今の如し」と言っています。過去
数千年、数百、千、万年...人類の経験はすべての人間の心の中に詰ま
っており、必要次第で現在意識に蘇えって来ます。



過去ばかりではありません。心の今の中に人間の将来の全ての可能性も詰まっています。一つの希望・計画の成功・不成功も「今」の中に見ることが出来ます。以上の事を言霊学原理に示される如く展開・活用するならば「今」に備わる人間の一切の記憶・意識を赤珠音図の父韻キチミヒシニイリの順に並べれば、人類の将来相とその予言が^{たなごころ}掌を示すが如く明らかになるに違いありません。以上の如く、今とは言霊イ次元の道(いのち)の間(ま)なのであり、人間の一切が存在する間なのです。

第二として、大祓の修祓の対象として取り上げられている天津金木について話を進めます。神話で謂う天照大神の岩戸隠れ以来、歴史的事実としては神倭朝十代崇神天皇による天皇と三種の神器との同床共殿の廃止以来、世界は須佐之男命の言霊ウの五官感覚に基づく欲望性能が他の現象界である言霊オアエの三次元領域をも支配する天津金木の社会一色の世界となりました。言霊オ(学問)言霊ア(宗教・芸術)言霊エ(政治・道徳)の天与の三性能は、言霊オの欲望を達成する為の手段としてのみの存在となりました。言霊ウは他の三次元と協調して働くべき人間性能であるべきものが、今や完全に言霊ウの独走により他の三性能は言霊ウの傘下に入ってしまった観があります。その状態が既に西欧に於いては三千年、日本に於いては二千年間続いています。この様な社会相を変革して、第一精神文明と第二物質科学文明との協調による人類の第三文明の時代を切り拓く為に先ず注目すべき仕事は、独走し、更に他の人間性能を支配している言霊ウの天津金木思想の修祓でなければなりません。天津金木が大祓されれば、必然的に人間の他の三性能言霊オアエも五次元並列の平等の関係を取り戻す事となります。大祓祝詞がその修祓の最初に天津金木を挙げたのも以上の理由であったからでありましょう。

大祓祝詞が制定された四千年近い昔に、日本人の大先祖である皇祖皇宗はこの事情を予見し、大祓祝詞を制定し、その修祓の第一に天津金木の名を挙げました事は、言霊布斗麻邇の原理による世界人類の歴史創造の御経綸が如何に素晴らしいものであるか、頭が下がる思いがいたします。

第三に申し上げたいのは、大祓の対象として挙げられている天津菅麻についてであります。天津菅麻五十音言霊図とは言霊原理の構造の基礎となる人間に与えられた五十音言霊という素材を生まれた時の、まだ人間知性が働き出る以前の不確かな状態で並べた音図であります。この音図を出発点として人間の言霊ウオアエ各次元の精神活動の音図が完成されて来ます。すべてを生み出す根本の言霊図でありますから、創造神伊耶那岐命の音図とも呼ばれます。これは伊耶那岐の大神が言霊原理の最終結論を成就する行法である「禊祓」を始めるに当り、その行為の基礎とし、拠り所とした「つくし ひむか たちばな をと あは ぎはら竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原」の事であります。

伊耶那岐の大神は禊祓を開始するに当り、先ず対象となる一切のものをこの菅麻音図上に照らし合わせて、その時処位・実相を見極め、その見極めた内容を更に自らの内面性真理である建御雷の男の神という音図上に置き足らわして一切のものに新しい生命を与えて行き、その実行方法の誤りない事を極める事によって、言霊原理の総結論であるみはしらのうずみこ三貴子を手にしたのであります。

以上でお分かり頂けると思いますが、古事記の禊祓に於て天津菅麻は、その禊祓の実行以前の準備作業として物事の実相や時処位を決定する用を果たす基礎の役目となります。禊祓の実行は更に建御雷の男の神という八咫鏡完成以前の、謂わば伊耶那岐の大神の内面にのみ自覚された建御雷の男の神、即ち仮初の言霊原理の鏡に参照して行われるのであります。大祓祝詞が大祓の対象として天津菅麻を取り上げますのは、その音図が禊祓の準備段階に於ける必要を述べ、その音図に照合された物事の実相、時処位の見極めが直ちに善悪、美醜、真偽、得失の裁定・判断に直結されて、それが禊祓であると思われることを否定しなかったからに他なりません。禊祓も大祓も一定の原理に基づく諸事物の善悪……の裁判なのではなく、一切を文明創造の光の中に抱擁することによって罪穢・コンプレックスを解消させることだからであります。

第四として大祓の対象になる罪穢の善悪(工)、美醜(ア)、真偽(オ)、得失(ウ)の相違とは何かについて考えてみましょう。三十年以上昔、

私が言霊学の先師、小笠原孝次氏の門を叩いて間もなく、私は先師に「この世に神というものがあるとすると、何故人間に悪があるのですか。神があるなら、世の中にこれ程多くの悪がなくて社会文明を創造して行く事が出来ないものでしょうか。」師は言いました。「お答えしましょう。その前に貴方に一つ質問します。悪とは何ですか。明瞭に言って下さい。」私は言いました。「例えば人を殺すことです。」「戦争で敵兵を大勢殺して勲章を貰った人がいます。どういう事でしょう。」「私利私欲で人を殺すこと、これは悪です。」「戦争で自国の利益を守るために宣戦を布告し、何万、何十万の人々を殺し、戦いに勝ち、大英雄と讃えられた大統領がいます。殺さなければ我が身が殺される場合もあります。これについてはどう思いますか。」問答をしている間に、私は何だか分からなくなって来ました。勢い込んだ口振りが当惑に変わりました。その時、師は次の様に教えてくれたのでした。

「本来悪は無いものなのです。謂わば光に対する影のようなものです。影ばかり見ている人には影があたかも実在するもののように思われるでしょう。けれど影は本来無いものです。光が当れば瞬間に消えてしまいます。影が何処かへ行ってしまったのではありません。悪も本来無いものです。心の光が当れば、その瞬間に消えてしまいます。何処かへ移動していなくなった訳ではありません。ですから悪は本来存在しません。強いて言うならば、悪は善が何であるか、を人間が分かるためののみ仮に存在する、という事が出来るでしょう。」

この教えを聞いている間に、私の心は深い感動に包まれて行きました。師は善悪についてのみ話をされました。けれど美醜・真偽・得失の相違についてもほぼ同様のことが言い得る事に気が付いたのであります。先師のこの教えはそれ以来、私の脳裏に留まり、「古事記と言霊」に於ける「襖袂」並びに本講大祓祝詞の「太祝詞事を宜れ。」の内容解明に決定的な判断の基礎となったのであります。

先師が教えてくれた「光と影」の内容を、言霊原理による人類文明創造を呪示する古事記「禊祓」の章では、事細やかに「大禍津日、八十禍津日……大直日・神直日・伊豆能売から綿津見三神・筒の男の三神」の処で説いております。その間の消息を此処で簡単に復習して、大祓の眼目を言霊学によって説明する準備の第五といたします。

古事記の禊祓に於いて黄泉国の文化を人類文明創造の材料として摂取する場合、道の長乳歯の神より飽咋の大人の神までの五神の働きで黄泉国の文化の実相が詳細に調べられ（「古事記と言霊」参照）、次に奥疎の神より辺津甲斐弁羅の神までの六神の働きで、摂取される黄泉国の文化の現状と、摂取された後にどの様になるか、が調べられます。次にその様になる事を可能にする方法が求められます。そこに現われるのが八十禍津日の神と大禍津日の神の二神です。この二神の働きは共に文化創造に欠く事が出来ない基礎原理ではあるが、飽くまで基礎原理であり、縁の下の力持ちの役目に留まる事が確認されます。この二神の内容が禊祓または大祓の重要な眼目の部分となりますので、簡単に説明します（図参照）。

五十音言霊図を上下に型どった百音図から両側の母音と半母音を除いた間の八十音は、物事の現象に係る音です。この八十音は上下が中間の横線を境として対称となります。この上下対称の音図は何を意味するか、と申しますと、そこから古事記の八十禍津日の神の内容が浮かび上がって来ます。横線を境に対称となる一音一音は同じ音であり、同じ実相を表わし、姿としては何ら変わるわけではありません。では何故上下に別れるのか、といいますと、上は光の世界であり、下は影の世界であるからです。光の中の上段は高天原天国であり、言霊原理自覚の世界であり、大祓で高山たかやまと呼ばれる領域です。それに引替え、光のない下段は黄泉国地獄であり、言霊原理無自覚の世界、大祓で短山ひきやまと呼ばれる領域です。

同じ音、同じ姿でありながら、どうしてこうも違うものとなるのでしょうか。実の所、この世の姿は唯一つ図の上段の姿以外には何もないので。それが違ったものになるのは、人類が禁断の実を食べ、天照大神が岩戸隠れして以来、人々は自らの心の光の自覚を失い、光の

ワ ヰ ヱ ヲ ウ		アイ エ オ ウ	高天原 光の世界 高山
ウ ヲ ヱ ヰ ワ		ウ オ エ イ ア	黄泉国 影の世界 短山

言葉を忘れてしまったからです。概念という便利そうな観念に基づく言葉を喋るようになり、その言葉で構成された見地から物事を見る時、物事の光の当らぬ影ばかりを見ることとなり、当然物事の実相を明らかに見る事が不可能となります。「葦の髄から天井のぞく」業を背負わされてしまったのであります。

では、どうしたら闇の中に閉ざされたものを光の世界に導くことが出来るのでしょうか。古事記の禊祓を更に辿って行く事とします。八十禍津日の神の働きで人間の心の光と影の対称のからくりが明らかにされました。この対称が明示されても、それだけで影から光の世界へ行けるものではありません。また大禍津日の神の所で説明されているように、言霊原理（菅麻音図）を土台とする言霊法則を学べば光の世界は開ける、と分かって、すべての人々にその原理の自覚を促す事が出来る訳ではありません。それが為に、八十禍津日も大禍津日も「禍」として直接にそれによって光の世界に導く事は不可であると規制され、八十禍津日も大禍津日も禊祓を行う基礎原理であるに留められます。そして禊祓成就の真法として神直日（オ）・大直日（ウ）・伊豆能売（エ）の三神が登場します。闇から光へ導くために八十禍・大禍は基礎原理に過ぎないから駄目であり、津日即ち日に渡されます。日は霊で言霊であり、光の言葉の事です。その光の言葉に渡す方法が神直日・大直日・伊豆能売の三神であります。そしてこれ等三神ならば黄泉国の文化一切を高天原の光の世界へ導く事が出来るのだ、との確認が底・中・上の三綿津見の神によって出来上がり、そこで日に渡す実際の光の言葉の配列が底筒男（エ・テケメヘレネエセ・エ）、中筒男（ウ・ツクムフルヌユス・ウ）、上筒男（オ・トコモホロノヨソ・ヲ）の三神であり、その光の言葉配列成就による禊祓を行う基礎原理の結論が、天照大神・須佐之男命・月読命の三貴子（みはしらのうずみこ）であります。

以上の事でお分かり頂ける事と思いますが、世の中の事物を闇から光の世界（高天原の創造世界）に引上げる方法は、それらの事物を光の言葉、即ち言霊原理（言霊イ）に基づいた言霊操作の智恵（言霊エ）より出る言葉を与える事なのであります。世の中の言霊ウ・オ・エ次元に展開する物事を、その姿を何ら破壊することなく、そのままの姿

で影から光の世界、黄泉国より高天原へ引上げ、物事が実際に存在する真実・実相の世界の歴史創造の材料として生かし、新しい生命に蘇えらせる唯一の道が光の言葉「霊葉」なのです。

少々難しい話が続きました。右の禊祓の方法を後世に伝えるために、天神様と尊ばれる菅原道真が作ったと伝えられるおとぎ噺^{ばなし}「桃太郎」についてお話ししましょう。「昔々、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山に柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。...」と噺は始まります。このおじいさんとは伊耶那岐の命のこと、おばあさんは伊耶那美の命と言います。おじいさんとおばあさんが合わさって一人になった姿を伊耶那岐大神と言います（古事記「身禊」の章参照）。おじいさんは山に柴刈りに行きました。山とは八父韻原理[㊦]のこと。柴は霊葉、現象子音言霊のことです。先にお話しした心の光と影の処で、影の世界から光の世界へ物事を引上げる唯一の道は言霊原理に基づいた現象子音（霊葉）の事と申しました。おばあさんは川へ洗濯に行きました。川とはアからワ、エからエ.....と流れる竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原の川の瀬、即ち伊耶那岐大神が禊祓をした川の中つ瀬の事です。洗濯とは勿論、伊耶那岐大神の人類文化創造の「禊祓」を謂います。

川上から大きな桃が流れて来ました。桃は百^もの事で、言霊百神の古事記の原理の事。この原理がおじいさんの柴、即ち霊葉である現象子音言霊の配列（綿津見・筒男）の確認によって完成され、言霊百神の原理が完成し、その中からこの原理を運用・活用する言霊工の完成体である桃太郎が誕生します。桃の原理の総結論である三貴子の中の桃太郎（長子）である天照大神のことです。

桃太郎（言霊工）は犬（イ）、猿（ウ）、雉（オ）、熊（ア）を家来とし、おじいさん（岐）とおばあさん（美）の作った岐美（黍）団子を持って鬼が島を征伐します。鬼とは言霊オの似、即ち黄泉国の文化のことです。めでたし、めでたし。

大祓祝詞の「天津祝詞の太祝詞事を宜れ」という事を現代に生きる人が実行する場合、現実どんな事を成し、またどんな事が起るのか、を説明するに当り、その予備知識を五乃至六箇条にわたり準備をして来ました。これ等の予備知識を心に留めながら、この現実の社会に起って来る一切の出来事を撮取・処理して、人類文明創造のための材料として新しい生命を与える言霊原理に基づく現象子音で綴られた言葉を発して、一瞬の今・今・今の此処に於いて業縁の闇の世界から光の高天原の世界に引上げる事によって罪穢を消し去って行く方法如何を改めて述べて見ましょう。

「天津宮事以ちて」

天皇（スメラミコト）が人類文明創造の政治を行うに当って……

「大^ち中^お臣、天津金木を、本打切り、未打断ちて」

天皇の代行者である大^ち中^お臣は、ここ三千年間、他の人間性能との協調を拒否し、独走して他の性能（アオエ）すべてを自らの言霊ウである欲望達成のための手段として来た天津金木思想の内容とその手段（カサタナハマヤラ）を大^ち中^お臣の心の中にすべて理解して、……

「千座^{ちくら}の置座^{おきくら}に置き足らわして」

大^ち中^お臣の心中に自覚している言霊によって構成された生命の原理（五十音言霊図）に照らし合わせて、眼前の出来事の内容、並びにその出来事が起って来た歴史過程等を、今・此処の一瞬に働く八父韻ア・カサタナハマヤラ・ワの配列に於いて把握し、

「天津菅麻を、本刈断ち、未刈切りて、八針^さに取辟きて」

物事を処理するに当り、どのような方法をとるかを決定する心の構造の原因である菅麻音図の母音と半母音を除いた後の八つの父韻の道理に基づいた、物事を対象として外に見る対処の思考方法を一切御破算にし、白紙に戻し……

「天津祝詞の太祝詞事を宜れ」

その上で、天皇御自身と全世界が一つの身体であるとの自覚の立場に立ち、眼前の世界で起っている出来事がすべて天皇御自身の過去身が「そうなれ」と命じた所の結果であり（ア・カタマハサナヤラ・ワ）、天皇御自身の責任であると受け止め、その結果の全内容を材料として、

天皇の大御心の内容である天津太祝詞音図に基づく歴史創造の方法ア・タカマハラナヤサ・ワから発する言霊子音の光の言葉で、それに新しい生命を賦与し、実行の叶う手順を示しながら「かくせよ」の命令を発令する事であります。その天皇の大御心の言葉は、眼前の出来事を一瞬々々、その場で影から光へ、破壊から創造へ、混乱を調和に、悲観を歓喜に、暗黒世界を光明世界に変え、世の中の罪穢は一瞬々々歴史創造の中に消えて行く事になります。

以上、「天津宮事以ちて……天津祝詞の太祝詞事を宜れ」の大祓操作の言霊原理による説明を申上げました。言霊五十音は今・此处「中今」に存在します。その言霊五十音を一瞬の次元イの間に於いて操作する天津宮事の政治は、歴史の中に起る種々の出来事の時処位並びにそれが起ってきた由来のすべてを言霊図によって把握し、摂取して、それ等を材料としてスメラミコトの歴史創造の法則、ア・タカマハラナヤサ・ワの天津太祝詞の順序に置き換える光の言葉・現象子音の言葉の命令を下す事によって皇祖皇宗御経綸の歴史を創造し、その創造の瞬間々々としての光の中に、過去のコンプレックスである罪穢は必然的に消滅して行く事になります（図参照）。

